二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 酒井　仁
挿絵 高浜太郎

序　章　007
第一章　産み落とされた闇　011
第二章　リュシィ陵辱、死闘の果てに　052
第三章　淫惑の蜜儀　104
第四章　感染する欲望　153
第五章　救済という名の呪い　189
終　章　243

# 登場人物紹介

Characters

## アクエアル

王国の危機に際し、聖なる泉より召喚された水の精霊騎士。かつて火の精霊ヴァハの姦計により快楽に堕ちたが、人々を救うため再び立ち上がる。

## リュシィ・ゼガルガード

王都を守る騎士団の若き女騎士。剣の腕は相当なものだが、明るく勝気な性格で、まだまだ少女っぽい部分も持ちあわせている。

## クロード・ゼガルガード

リュシィの双子の兄で、誇り高き騎士団長。アクエアルの志に心酔しており、仕えられることを至上の喜びとしている。

## メルディナ

アクエアルと瓜二つの容姿を持つ黒き精霊騎士。精霊の力を躊躇なく振るい、欲望のままに快楽を貪る。

## ヴァハ

国王エイヴァゼインの身体を媒介に召喚された火の精霊。アクエアルに徹底的に肉欲を味わわせ、隷属の花嫁へ仕立て上げた。

# これまでのあらすじ

聡明にして、慈悲深い王がいた。

国を想い民を愛し、正義と平和を重んじる賢王を、民は敬愛し、騎士は忠誠を誓った。

だが、平和に倦み戦乱を求める一部の騎士たちの手によって、「王国」の平和は喪われた。

古の秘術を用い、荒ぶる火の精霊王【ヴァハ】を、王の肉体に宿したのだ。王は豹変し、国土は荒れ果て、人々は笑顔をなくした。

邪悪なる王の暴虐を正すべく、少女の祈りに応え召喚された水の精霊騎士【アクエアル】だったが、卑劣なヴァハの策略にはまってしまう。無垢なる乙女の肉体は汚され、純潔は踏みにじられた。志高き人々は去り、戦乱の火の手は収まることがなかった。破壊と混乱に酔いしれる火の王を、水の騎士は止めることができなかった。

止めるどころか、その身は淫欲にまみれた王に蹂躙され、「王妃」という名の性奴隷として昼夜を分かたず犯され続けるのみであった。

そして、七年の歳月が流れ――――――――。

## 第二章『リュシィ陵辱、死闘の果てに』より

口ではそう言いつつ、内股の筋肉は切なげに震えっぱなしだ。自然の欲求に従って尿道を解放すればどれほど心地よいか、そんな誘惑を懸命に振り払い、邪精霊を睨み返すと、意外やメルディナはあっさりと陰茎から手を放した。

「お楽しみはまだまだこれからですものね……」

ぱちんぱちんと甲冑の留め金を外し、メルディナが乳房を露わにする。たおやかな手がアクエアルの胸元にも伸びて、同じく真っ白な肉球を露出させると、重量感を伴って「ふるんっ」とこぼれ出る。無闇に大きいだけでなく、張りがあって形がよく、染み一つない琥珀色。滑らかな肌がうっすらと汗ばんだ様に色香が立ち上る。

むにゅぅ……左手がゆっくりと右の乳房を揉みしだく。その手つきはむしろ繊細で、愛おしむような愛撫にじんわりと穏やかな快感の波紋が広がっていく。

「んっ、ふ、触れるな、汚らわしい……！」

「好きにしろって言ったり、触るなって言ったり忙しい子ねぇ。ここは触って下さいってこんなに充血してるわよ」

「くぃぅううッッ！　んっ、はぁああ……んっ！」

きゅんっ！　メルディナの指先が桃色の突起をねじり上げる。灼けるような痛みにも似た愉悦がアクエアルの全身を貫き走り、手足がぴーんっと突っ張った後、緩やかに弛緩する。半開きの唇からだらしなく舌が覗き、目の焦点は虚ろになる。

（い、いけない、自分で思う以上に……身体が敏感になっている。乳首だけでこんなに感

じてしまうなんて……）

勇ましく水竜剣を振るっていた時の覇気は、もはや危うい。弱音を吐くわけにはいかないが、続けざまに左右のニップルを交互につねり上げられ、そのたびに甘やかなよがり声が口から漏れてしまう。

「くぁんっ！　んっ、ひ、ひぁううっ……！」

「国を荒らす悪党たちが見てるのに、何気持ちよさそうな声出してるのかしら、この淫乱精霊様はッッ。情けないとかッ、はしたないとか思わないのかしらっ？」

ぎりぃっ、ぎゅむぅううっ……ピシャァンッ！

「はひぃんッッ？」

鞭のような平手が真っ白な巨乳に赤い平手跡を残す。

ぴしゃんっ、ぱしんっと鋭いスパンキングに肉球がふるふると揺れ、乳首の痛みにヒリヒリと肌の灼ける痛みが快感とない交ぜになって精霊を困惑させる。白磁の肌が哀れにも赤く染まったところで、メルディナは身を屈めてニップルを口に含む。

「んぅっ……く、はぁ……っ。く、くすぐったい……」

れろ、れろ……るちゅっ、ちゅぱちゅば……っ。

サディスティックな責めの直後の乳首への舌愛撫は、うって変わってねっとりと執拗で、情愛がこもっていると言ってもいいほど絶妙な舌使い。アクエアルの理性を麻痺させ、肉体を乗っ取ろうという悪意に基づいた行為だとわかっていても、平手で灼けた乳房にぬる

りと生暖かい唾液の感触が心地いい。
（ま、惑わされるな、アクエアル！　心地よさや快感は一時のもの、このまま堕落していくなど、クロードやリュシィに顔向けできぬ……でも、き、気持ちいい……ッ）
「あふ、ぅん……おっぱいから甘いミルクが滲んできてる。母乳吸われるのって特別いいものだものね。乳腺が疼く感覚が私にも伝わってくるわ」
「ちが……気持ちよくなど、ない……！　うあぁっ、そんなに強く吸っちゃ、ふわぁああんっ、あひぃいっ」
分身だけあって、メルディナの責めは実に的確にアクエアルの過敏になった部分をピンポイントで探り当てる。乳首から意識を逸らそうとすると、すかさず内股が撫で上げられ、びっしょり濡れた花弁がまさぐられる。それも決して膣奥にまで達しない、入り口だけをくすぐるような愛撫なので、物足りなさに肉壺の奥からさらに愛液が溢れ出る。
（こんな……こんな状態であの男根を挿入でもされたら、入れられただけで達してしまうかも……そうなったらメルディナの思うつぼだ……ッ）
弱音を悟られてはならない、感覚は共有していてもメルディナとアクエアルの人格はあくまでも別物だと自分に言い聞かせる。堕落したふりをして隙を突き、逆転の糸口を掴むことは不可能ではないはずだ。
だが、メルディナが下腹部を突き出し、肉溝に熱くたぎった肉棒が「ぞりっ」と擦りつけられた瞬間、精霊のしたたかな目論見はあっけなく潰えそうになる。それほどまでに、

巨根の存在感は圧倒的だ。
（ヴァギナへの刺激に、陰茎の刺激が加味されて……ッッ）
「うふふふ、おちんぽ欲しくてたまらないって顔してるわね。私ももう焦らすのに飽きちゃった、そろそろあなたのおま○こを食べさせてもらうわ」
背骨に沿ってメルディナの指が這い上がり、アクエアルの身体が硬直する。腰から力が抜けかけた一瞬の隙を突いて、「ぐいいっ」と広げられた股間に水巨根が一気に距離を縮めてくる。
「あっ、待っ」
「さようなら――――愉悦と共にお逝きなさい」
ぬずっ……！　ぐぶぶぶ、ずぶぶぶぶ～～～ッッッ!!
「うぁ、ふあぁあッッ！　あひゃぅううっ、うっ、うくぅううッッ！」
挿入と同時に、アクエアルは目の眩むような衝撃に襲われ、呑み込まれる。
巨大な肉塊に膣をこじ開けられ、こじ開ける感覚。ぎちぎちと軋みながら男根を呑み込み、また呑み込まれる。愛液のぬめりがあってもなおきつい膣内を容赦なく突き進み、ハンマーで殴られたような衝撃が子宮を轟き走る。
「あひぃっ、ひぃ、いぃいい！　おま○こ、にッ！　入ってくるッ、入っ！」
「まだよ、まだ全部入りきってない……根本、根本まで……ぇえぇっ!!」
ズシィインッ！　ごっ、ごりりっ、ぶちゅんっ！

反射的に上に逃げようとするアクエアルの両肩にしがみつくように、メルディナは下腹部を力いっぱい打ちつけ、巨根が根本まで膣に収納される。打ち込まれた肉の杭は肉壺を隙間なく満たし、海綿体の脈動が骨盤を軋ませる。まくれ上がったカリ首がぞりりと愛液をこそげながら膣壁を掻きむしる。

ずずっ、ずぶ、ぞりりっ。ぶちゅ、ぷしゃっっ！

圧倒的なボリュームに蹂躙され、膣肉は絶頂の痙攣を繰り返す。媚肉の合わせ目から押し出された蜜液が、噴水のように弧を描いて噴き上がり、地面に落ちる。

「あひゃぅう、こんなッ、これしき……ッッ」

「んはっ、すご……思った以上に強烈……だわ。ちんぽを挿入する快感と、挿入されるおま〇この快感が交互に襲ってくる……たまらない……」

男根の快楽に慣れているであろうメルディナでさえ、唇を噛みしめて両性同時の愉悦に圧倒される。ましてや男根の感覚にまだ慣れていないアクエアルは、しなやかな肢体が逆海老状に反り返って、メルディナを弾き飛ばさんばかりに悶絶している。

「ひいッ！　ぐ、くぅっ……あ、あぁ……っっ！　ふぁ、あぁああ……ッッ」

「はぁああんっ、わ、私もこんなの……イッチャう、出る、でるわアクエアルぅうう！」

跳ね上がる腰が自分でも止められない。なんとかメルディナを押しのけようと手を前に出すと、両手首を掴まれた。「ふわっ……」と一瞬、腰が浮き上がった次の瞬間、浮いた股間めがけて陰茎が叩きつけられる。

「ひぐっ……！」
骨盤が割れるんじゃないかという衝撃、そしてあり得ないほどの深みへのインサート。子宮がひしゃげ、下腹が肉棒の形に突き上げられそうだ。いや、実際に肉の凶器はさっきよりも長さと太さが増し、硬度はもはや鋼鉄の柱そのもの。
メルディナが身体を反らせると、なんとペニスだけでアクエアルの下半身を持ち上げてしまう。両腕を掴まれているので、アクエアルは完全に宙に浮いた格好になる。
「ふぁ、あ……っ。お、ちんぽで身体浮いちゃう……っ！」
ぶびゅっ、ぷしっ……ぶしゃぁあッッ。
「はぁあぁ……で、出てるぅ、熱いのがお腹の奥にぃぃぃ……」
互いの結合部からは、ひっきりなしに肉汁が溢れこぼれ、時に水流となって噴き上がる。それは愛液、ザーメン、そして絶頂時にのみ分泌されるアクメ汁が入り混じったモノで、独特の臭気が鼻孔を抜けると、イク前にも増して渇きが強くなる。
精霊の力によって作られた男根の貯精力は人のそれを遥かに上回り、新たな欲望の印をアクエアルの子宮に打ち込むたび、メルディナの顔も恍惚に彩られる。
「あぁいいわ、いい、アクエアルのおま〇こ最高よ。でもまだ足りない、もっと何もかも忘れて法悦に浸りなさい。あなたを手に入れるため、あなたのすべてを手に入れるためなら、私はなんだってやる……そう、こんなことだって！」
「くぁああっ⁉　おしり、なんでお尻……ふひぃぃィイッッ」

第二の男根が尻穴を征服しにかかっていることに、アクエアルは気付く。
水の力で作られた陰茎が根本の部分で増え分かれ、「ずぬぅぅうっ！」という不快な感触と共に一気に半分以上呑み込まれた。尻穴の皺が伸び、括約筋がこじ開けられる。違和感と強烈な締めつけ……水陰茎は触手のようにうねり、ずぶ、ずぶと確実に直腸を征服していく。肉をぶりぶり巻き込んで陰茎が引き抜かれると、力が抜けそうな解放感が襲ってくる。
肉棒と熱く灼けたアヌスの背徳感溢れる快感に翻弄されていると、別の水触手がアクエアルの巨乳にぐるりと巻きつく。ぎゅむ、ぎゅむと房を揉み上げ、ニップルを細い触手がコリコリと締めつける。前後の穴と敏感な乳首への的確な責めに、もはや為す術はない。
「ふわ、あ、ぁ……ッ。う、ごかない……で……お乳も、お尻まで……前と同時にこんな……あぁああッッ!!」
「おま○こだけじゃなく、尻穴もさんざん開発されてきたものね、いいわよ、心ゆくまでよがり狂いなさいッッッ」
完全に根本まで挿入したのち、凄まじいほどの勢いでピストン運動が前後に叩きつけられる。長大な肉槍に串刺しにされて宙に浮いたアクエアルの尻穴を、同じくらい太いイチモツが貫きほじり、やがて直腸に溜まっていた空気を外に押し出す。
ぷぴっ、ぷぅ、ぷひぃぃぃ～～ッッ！
「あぁ、いや、いやぁああ……そんなに激しくっ、やめっ……！　空気が、漏れっ……あ

ふぅうんっ、あ、はぁあんっ」
「いいわ、その羞恥の表情がゾクゾクするわ。ケツ穴までほじくり返されて、居たたまれないでしょう、けれど気持ちよすぎてたまらない、そうなんでしょう？」
メルディナは精霊騎士を陰茎で縫い止めたまま、膝を立てて立ち上がった。
両手首を掴まれたアクエアルの豊満なボディを支えるのは乳房に巻きついた触手と、膣穴と尻に刺さった二本の陰茎のみ。支えのない不安定感が快感に戸惑う水精霊をさらに翻弄し、すらりと長い下肢が断末魔のようにひくんひくんと跳ね上がる。
「ぎひ……ぐひっ、ぃいい……！」
ぎりりと噛みしめたアクエアルの唇の端から、泡が噴き出ていた。
真円に近いほど見開かれた両眼はほとんど白目を剥いた状態に近く、突き上げられる胸からは今にも心臓が飛び出しそうだ。
（このままじゃ……頭が真っ白に……だめ、負けては駄目……なのに……）
がくがくと首を前後に傾けるアクエアルの様子に、メルディナは満足げな笑みを浮かべる。アクエアルの心が折れかけていることを確信したのだ。心の壊れたアクエアルの肉体は抜け殻同然となる。その状態で再び同化してしまえば、アクエアルの肉体も精霊の力も、すべてメルディナただ一人のものとなる。
「とどめよ……食らいなさい、偽善まみれの淫乱精霊騎士さん……ッッッッ」
メルディナは皮一枚でギリギリ堪えていた欲望を解放した。

## 第三章『淫惑の蜜儀』より

放尿の迸りは精霊の花びらを激しく震わせ、すでに敏感になっていたヴァギナ全体を振動させる。放尿の解放感と相まって、アクエアルはびくんびくんと何度も身体を跳ね上がらせながらアクメに達していた。

「ひぃい……ふひぃ……ッ。はぁ、あ、ぁあ……」

放心した顔で最後の一滴を尿道から滴らせると、「ずるっ」と膝が折れてその場にくずおれる。足下にはまだ湯気を立てている聖水の小池ができていたが、そこにあっけなく尻餅をつき、立つ気力すら残っていない。

（わたし……おしっこを漏らしながらイッてしまった……あぁあ……っ）

呆然と座り込む精霊の前で、騎士たちは自らの手や身体に付いた聖水さえも舌でねぶり、喉を鳴らして甘露を飲み下す。放出したての黄金水は塩気の中に滋味があり、精霊の体内を濾過して作られた液体にはたっぷりと水の気の力が宿っている。だが、彼らの歓喜は絶世の美女の聖水を口にしているという歓喜が大部分だったのかもしれない。

それが証拠に精霊の小水を全身に浴びた男たちの股間は布地を突き破らんばかりに天を仰ぎ屹立している。肌から染み込んだ精霊の力は、メルディナの呪縛を中和したばかりではなく、生命のエナジーを注ぎ込んでいたのだ。

それはメルディナの力に正気を失っていた状態にも似ていたが、彼らはアクエアルに対する敬愛は失ってはいない。ただ噴き上げるほどの情欲が抑えきれないのだ。

「うあぁあああッッッ！　愚息が……ッッ、愚息が破裂しそうですッッッ」

「ぬぅぉお、ご、ご無礼をお許し下さいアクエアルさまッッ」
バリバリバリィイ！　ビリビリィイイッッ！
上腕の筋肉を膨れ上がらせ、渾身の力で革のズボンを引き破ると、鋼鉄のように黒光りした肉の凶器が姿を現す。浮き上がる血管は海綿体にどんどん血液を送り込み、亀頭は充血したように赤黒くてかり輝く。十数本の陰茎が同様に猛り反り返った光景は、壮観としか言いようがない。超活性化した生命エナジーが行き場を求めて、騎士たちの男根を全力で勃起させているのだ。
（す、凄い……あんなに大きく充血して、とても苦しそう……）
彼らを不心得者とそしる資格は自分にはない。それどころか、放尿しながら絶頂に達してしまった今は、彼らの異常興奮が痛いほどに理解できる。彼らの溜まった精を処理してあげたい……いや、むしろあの反り返った男根に触れたいとさえ思った。
しかし、足腰にまるで力が入らない。アクエアルは愉悦の余韻で震える肩をきゅっと押さえ、右手を伸ばし手招きする。
「苦しいのですね……と、解き放ってもいいのですよ。私の、私のはしたない姿でよければ見て下さい。そして……」
その言葉に一人の兵士がふらふらと立ち上がる。上衣の裾からぽたぽた垂れ落ちるのは聖水の滴。尿まみれの手で股間のイチモツを握りしめると、一歩、また一歩とアクエアルに近づいてくる。

「わ、私は……野盗に占領されていた村をアクエアル様たちに解放され、兵に志願した者です。こ、こうして共に戦い、王国の平和を築く手助けができるだけでもこの上ない幸せだというのに、そのうえこのような真似、を……っ」

唇をわななかせる兵士の顔はまだ若い。それゆえ性欲も烈しく高ぶっているのだろう、言葉とは裏腹に勃起陰茎をしごきながら、精霊の前に佇む。その様子を他の騎士たちの固唾を呑んで見守っていた。

しゅっ、しゅ、しゅっ！　火が点きそうな勢いのしごき立てに、先端に先走りの汁が滲む。だが、それでいてなかなか射精に達しないのは、海綿体があまりに膨張しすぎているためだろう。アクエアルはそっと伸ばした手を兵士の手に重ねる。

「んひぃっ、あ、アクエアル、さま……ッッッッ」

「よいのです。命を賭して民のために戦う者にも、心と身体の癒やしは必要なのです。あなたは、あなたの望む通りのことを私にすればよいのですよ」

そう促しつつ、精霊の鼓動が早鐘のようになり、胸の奥が熱く火照る。

赤黒い肉の棒は、灼けた金属のように堅く熱を帯び、兵士の緊張と興奮が伝わってくるようだ。先端に滲む汁は独特の臭気でつんと鼻をつき、精霊は鼻をひくつかせ、頬を紅潮させて陰茎の匂いを堪能する。そんな顔を兵士に見られることでアクエアルの興奮もいや増すようで、陰茎を握る手にも力がこもる。

ただ力任せにしごくのではなく、リズムを持って、緩急をつけながら優しく揉み上げる

ように摩擦を加えると、若い兵士の顔がいっそう紅潮し、込み上げる快感に口が半開きになっていく。

しゅっ、きゅ、しゅるっ、きゅぅっ……。

「気持ちよいのですね、ここ……遠慮することはありません、欲望は罪ではないのですから……思いのたけを、存分に吐き出して下さい」

幼子に言い聞かせるような口調に、兵士の顔が安らかに緩む。切なさのこもった視線がアクエアルの美貌の上をさまよい、二つの白い肉球でしこっている桃色の突起物に定まるのを見て、精霊は胸を高鳴らせつつ頷く。

「ここ、ですか……？　構いませんよ、満足するまで何度でも……」

兵士と熱い視線を絡ませるアクエアルの瞳も潤んでいる。爆発寸前の獣欲と、一抹の罪悪感のない交ぜになった表情がたまらなく精霊の淫心を煽る。フィニッシュしやすいように指に力を込め、しごく速度を徐々に速めていくとガクガク痙攣する膝の震えさえ愛おしく感じられる。

今にも泣き出しそうな青年に、ねっとり絡みつくような囁き声で、促す――――。

「だ、出して――――下さい……っ」

「うっ、うぁああッッッ……!!」

ぶびゅるるっっ！　ぶばっ、ずびゅびゅるる～～～ッッッ!!

濃厚なゼラチン状の塊が発射され、真っ白な乳房の上で爆ぜる。その後は堰を切ったよ

うに溢れ出ては宙に弧を描く。乳房一面を覆い尽くす白濁は垂れもせずこびりついて、その粘りけと熱さ、そしてむせかえる生臭い臭気に頭がくらくらする。
「うひぃぅっ、ヒッ、はひぃいいッッ！　アクエアル、さまっ、あぁあ止まらないぃ！」
ずびゅっ、どびゅ、ぶびゅぅうう〜〜〜ッッッ！
「きゃうんっ！　あ……熱い……ザーメン、熱いです……ッ！」
特農牡汁を浴びる精霊姫の顔は恍惚と悦楽に浸りきっている。
陰茎から放した手を胸に当て、こんもり淫糊の乗ったニップルを自らつまむと、突起は痛いほどしこっている。「ちゅるんっ」とザーメンのぬめりで突起を弄るだけで、背中が痺れるほど気持ちよく、指の動きが止まらない。
「ん、ふぅっ……ザーメンが、肌から染み込んでくる……ッ」
乳首弄りに耽るアクエアルの目の前で、陰嚢のすべてを放出した兵士はへなへなとへたり込む。快感が凄すぎたのか、目尻には涙が光る。その肩をぐいと押しのけると、別の騎士が精霊の前でイチモツをしごき始める。
その隣に別の兵士、脇からまた別の騎士が肉棒を精霊に向けて摩擦する。アクエアルは思わずごくりと生唾を飲み込み、唇についた白濁を舌でこそげねぶる。
「あなたもどうか、溜め込んだ苦しみを解き放って……」
彼らは精霊に向けて射精する若き兵士を見ながら、すでに限界までイチモツをしごいていたのだろう。次々と股間から噴き出す欲望を、美しき女君主に向けて迸らせてゆく。

## 第五章『救済という名の呪い』より

「おぉお、なんという締めつけ……さすがアクエアル様の尻穴！　わ、我が肉棒をッ、存分に味わって下さいッッ」

ぬぶっ、ずぶぶぅっ。括約筋がこじ開けられ、長大な牡肉が直腸を犯す感覚に、アクエアルは声にならない声を上げる。アヌスが精霊の弱点であるというのは、いつしか男たちの間では周知の事実となっていた。それも根本までずっぷりハメ込んで、激しく肛門を擦り立てられるとあられもなくよがりまくってしまう。

（おっ、お尻っ、穴が、痺れるぅううう……っ！　あぁああっ、まだ奥まで入ってくるぅウウッッ）

騎士は骨盤をがっちり固定して、長竿を完全に埋没させる。直腸にパンパンに詰め込まれたペニスの重量感に、被虐的な悦びが込み上げる。

「ぎひ、ぃい……お尻は……お腹苦しいひぃ……！」

騎士が長身すぎたのか、アクエアルはつま先立ちを強要され、ほとんど尻穴串刺し状態だ。完全にアヌスを征服したところで手が骨盤を放し、精霊の二の腕を掴み、上下に腰を揺すり始める。肉棒が肛門肉をぞりぞり擦り上げ、尻肉の熱く灼ける感触にアクエアルは銀髪を振り乱して悶え始める。

「あひぁああ、ひぃん、ひぃいっ！　お尻だめ……これ以上ッッ！　あっ、あ、そんなに激しく……くふぅううッ！」

肛門から押し寄せる倒錯的な快感を前に、理性や思考が麻痺してゆく。ずん、ずん、ず

しんっ。内臓が真下から突き上げられる苦痛、そして尻穴を欲望を満たすための道具として扱われているという意識さえもが、愉悦の火となってアクエアルの快楽中枢をじりじり炙るのだ。

（わかってるっ、彼は単に欲望のはけ口に私を使っているわけではない！　私に癒やされたいと心から願っているだけ……なのに、こ、こんなに気持ちよくされたら……！）

彼らは君主であるアクエアルを蔑んでいるわけではない。

むしろ心からアクエアルを敬愛し、精霊のために尽くせることに喜びを見いだしている。だがそんな心根とは裏腹に、彼らのアクエアルの扱いは尽きせぬ肉欲のはけ口以外の何物でもない。そして何より、そういう扱いを受けることで、アクエアルも快感を感じるようになっていた。

「あぁッ、最高です、我が君のケツ穴ほど男を満足させるケツ穴は他にないと断言しましょう！　いやらしく竿を呑み込む肉の皺一本までも愛おしい！」

「んくぅ、おっ、お尻が、お尻の中でちんぽが暴れて……んひぃいっ」

ケツ穴を抉られよがるアクエアルの胸に顔を埋めて母乳を啜るクロードが、ヴァギナを指で掻き回しながら賛同する。

「むちゅっ、んっ、その通りだ！　アクエアル様ほど男の淫らな心を掻き立てる乳首を持っている女は他にいない！　それに止めどなく溢れるおま〇こ汁のなんとはしたなきことだろう……我らに何十、何百回と犯され、子種を搾り取ってなおこの締めつけ！　もう我

慢できません、我がモノの挿入をお許し下さい陛下!!」
母乳まみれの騎士の顔からは甘い匂いが立ち上る。唇をれろりと舐めると、尻に長大な茎を突き立てられた腰をぐいと抱き寄せ、下腹部を前に突き出し、陰茎の先端で銀の陰毛を掻き分ける。
「クロード……あ、あなたたちが私の身体を求めていることは承知しています。けれど、もしもそうする必要がないのなら……こんなことをしなくてもよいのなら、とは思いませんか……?」
尻からの悦楽をグッと堪えつつ、アクエアルはなけなしの理性を振り絞って騎士に問いかける。クロードは精霊の言葉の意味をわかりかねたように、花弁に亀頭を押しつけたまま精霊を見返した。
「それは……どういうことですか、アクエアル様」
「メルディナのもたらした、災いがなくなれば……私の癒やしも、あなたたちは必要とはしない……王国は、以前の静けさを取り戻す、違い……ますか……?」
それは、アクエアルの存在意義そのものを否定する言葉だった。
火の王亡き後、水の精霊がこの国にもたらしたものは国の復興と平穏、そしてそれを上回る災いではなかったのだろうか。精霊の言葉にクロードは戸惑いの表情を浮かべる。
「アクエアル様が何をお憂いになられているのか、非才の私には正直わかりかねます。平和、静けさ、それもいいでしょう。しかし我々王国の民は、それ以上の幸福を知ることが

できたのです、他ならぬアクエアル女王陛下のおかげで！」
「く、クロード……？」
「気高き水の精霊の恩寵をすべての民が賜れるよう、リュシィが中心となって今のやり方を考案し、運営してくれています。陛下の『癒やし』は王国の隅々にまで行き渡り、陛下の御力を知らぬ者にまで影響を与えているのです」
「リュシィ、が……」
　精霊は亜麻色の髪の騎士を見やったが、リュシィはただ無言のまま。それとは対照的に金髪の騎士は熱に浮かされたように語り始める。
「すでに多くの辺境の民が巡礼者となって王都を訪れ始めています。他ならぬアクエアル様、あなたにお目通りを願うためです。彼らは残らずあなたの御威光に触れ、あなたへの帰依を約束しています。やがては王国のみならず、北の地、砂漠の部族、海辺の民すらもが水の精霊の名の下に統一されましょう！」
「わ、私はそのようなことまで、望んでは……」
　騎士クロードの目は尋常ではない。アクエアルへの敬慕という熱情に浮かされ、自分が正気を失っている自覚すらない。
「老若男女は問いますまい、すべての人間が陛下の魅力にひれ伏すのです！　陛下の美貌、銀色に輝く髪、白い肌、芳しい体臭、豊満な乳房、豊かな臀部、そして、そして淫らに男を咥え込む前と後ろの穴……ッッ」

「きゃふ……ッッッ」
ぬぶっっ……！　喋るうちに興奮を増したクロードは精霊の腰を抱き寄せ、あてがっていた陰茎をずぬりと花弁に突き入れる。油断していたアクエアルは青年の圧倒的なボリュームと固さに息が詰まりそうになる。前と後ろを塞がれているだけのはずなのに、内臓がそっくり男根に変わってしまった錯覚が脳裏をグルグル駆けめぐる。
「今さらッッ！　この悦楽を捨てるなどッ、忘れるなどッ、できようはずもありませんッッ!!　うぉおッッ、おぁあああああ!!」
凄まじい勢いで膣穴を抉る抽送に感化され、背後の騎士の動きも一段と活発になる。
ずりゅっ、ずりゅりゅッッッ！　ぬぶ、ぬぷぷっ、ぐりゅぅうンンッッ!!
「あぁ、ひぃい、ひはっ、ふ、深いィイッッ！　おま〇ことお尻の穴、どっちも深いィイイイ……ッッ」
二穴を同時に突き上げられ、臓腑が口から飛び出しそうな苦痛と愉悦がアクエアルの脳裏を掻き回す。理性の手綱が緩み、拡張される尻穴が灼け、激しく膣壁が擦られる感覚が快美の炎となって子宮で小爆発を繰り返す。
（正気を失っているのは、クロードたちだけじゃない、この私もとっくに……）
ごすごすと突き上げる二本の肉槍の上で、精霊の手足が跳ね回る。騎士の首に両腕をしっかり回し、アクエアルは濃厚な口づけをする。くちゅくちゅれろれろと舌を絡め、唾液を交換しながらしっかり抱きあうと、青年の胸板で潰れた乳房から「じゅわっ」と甘い母

乳が染み出てくる。
（でも、だからこそ……私だけでもこの快感に屈してはいけ、な……だ、けど……！）
「わ、私どももう我慢なりませんっっ！　お、お慈悲を……！」
二穴を犯される美貌の精霊を見守っていた男たちが、ざぶざぶと浴槽に足を踏み入れながら、いきり立った肉棒を取り出す。そしてアクエアルの手や銀の長髪を取り、股間のイチモツを握らせ、あるいは絡ませてしごき立てる。
（あぁっ、なんて強烈な匂い……っっ）
目の前に突き出された陰茎にぞくりとするほどの興奮を覚え、精霊は口いっぱいにそれをほおばり、唾液をまぶして吸引する。淫ら極まる表情でフェラチオを続けるアクエアルの乳房にも左右から男根が押しつけられ、亀頭が乳首をコリコリと刺激してくる。
ずぐちゅ、ぐじゅっ、じゅぶ、じゅぷぷっ！
「ぬぁあああッッッ、陛下の尻にッ、出ます！　出ッッッ……！」
短い呻き声と共に、尻穴を犯す騎士が痙攣する。直腸に注ぎ込まれる体液の熱さ、発射の勢いで腸がビリビリと振動して新たな快感を生んで精霊を責め苛む。一気に快楽の頂に登りそうになるのを、アクエアルはクロードにしがみついて懸命に堪える。だが、精霊を強く抱きしめるクロードの腕にもぐぅっと力がこもるや、騎士は溜め込んでいた息をドッと吐き出す。
「ぐぅうっ、私ももうッ……！　アクエアル、様……ッッ」

「えっ、ダメッ⁉　い、今前にも出されたら……はひっ、あうぅうぅッッッ！」
どくんっ！　どぷっ、びゅるっ、どく、どくどくゥウッッ‼
膣にみっちり詰まったクロードの肉棒が大きく上下に痙攣する。未だ痙攣を続ける直腸内の陰茎に何度も激突し、そのたびに熱い体液の塊が砲弾のごとくに打ち込まれ、お腹の奥が灼熱のマグマで満たされていく。
子宮に収まりきらない大量の白濁が胃の腑からせり上がり、口から吐き戻されるような錯覚の中、アクエアルは凄まじい快楽の波濤に呑み込まれる。
「くあぁあああッッッ、んうぅ、あおぉおおぅうううッッッッッッ……!!!!」
唇から吐き出される叫びはもはや言葉にならない。跳ね上がる下肢が自分でも抑えられず、前後の肉の合わせ目からはザーメンの飛沫、そして淫らな潮が噴き上がっている。愉悦に歪む視界の奥で、男たちがひときわ濃厚になった浴槽の湯水を手で汲んでは飲んでいるのが見える。
胃袋いっぱいに詰め込みながらも、彼らの視線はアクメの痙攣に包まれた自分を食い入るように見つめている。
（あぁ……私は……また、わたしは……）
これから何が起こるのか、アクエアルにはわかりすぎるほどにわかっていた。
ここにいる騎士、兵士の全員が満足するまで、自分のありとあらゆる穴に、肌に、髪に欲望の証を注ぎ込まれ続けるだろう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**